
あの葉っぱがおちたら

にた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの葉っぱがおちたら

【Nコード】

N3205D

【作者名】

にた

【あらすじ】

「あの葉っぱがおちたら私もきつと死んじゃうんだ」ドラマなどでよくあるシーン、病室から見える葉っぱからの視点で描いてみた物語です。

（前書き）

初投稿作品です。

完成度が低いかもしれませんが最後まで読んで貰えたら光栄です。

ある夏の日――。

「ミンミンミン」

「あーもう、うるさいなー！せっかく気持ちよく寝てたのに、ぼくの近くで鳴かないでよー！」

「おお、ごめん、ごめん。ちょうどいい木があったからついとう。」
セミのじいさんが平謝りした。

「悪かったのう、葉っぱのぼうや。」
そついうとセミのじいさんは飛んでいってしまった。

「ぼうやじゃないよ！もう立派な大人だ！」
「ぼくは、飛んで行ったセミのじいさんに聞こえる様に大声で言った。」

ぼくは、生まれた時からお母さんにくつついている。
羨ましがるやつもいるけど、ぼくだって鳥や犬みたいに自由にい
ろんなところに行きたいし、恋のひとつものだ。
でも、葉っぱの運命なんてたかがしれてる。
冬になる前に、みんなしわになつて死んじゃうんだ。

そんなある日、ちょうど正面にある病院の一室に女の子が入院して
きた。

ぼくは恋をした。

毎日ぼくはあの子に話かけた。

「君の名前は？」

「どこからきたの？」

「おはよう。」

「おやすみ。」

——いつしかお母さんにくっついてる葉っぱは、ぼくだけになつていた。

ある日、いつもあの子の病室の窓辺にいるスズメくんがこっちに近付いて話しかけてきた。

「なんだお前、あの子に恋してるのか？」

「う、うるさいな、どうだっていいだろ！」ぼくはとっさに答えた。

「でも君はいいな、毎日あの子の近くに行けて。」
ぼくは羨ましそうにスズメくんにつばやいた。

すると、スズメくんは呆れた顔をして、
「君は分かっただけで、あの子は君のことが好きなんだぜ。」
と、言った。

「えっ、ホント!？」
ぼくは声を弾ませて尋ねた。

「ああ、『あの葉っぱと私は一心同体なの、あの葉っぱが落ちたら、きっと私も死んじゃうんだ』ってさ、一心同体って好きってことなんだぜ。」
スズメくんは当たり前のように言った。

「……………」
初恋が実るなんて何%の確率だろう、ぼくは嬉しさと驚きで何も言えなかった。
それから僕は毎日スズメくんと話をした。

あの子の名前。

どこからきたのか。

おはようと言ってくれていた。

おやすみと言ってくれていた。

スズメくんは毎日あの子の言葉を届けてくれた。
言ってみればスズメくんは恋のキューピットだ。
そして、ぼくにとって唯一無二の親友だ。

言葉を届けてくれるだけじゃなく雨の日や風の強い日には、いつもぼくを守ってくれた。

「今日も一雨来そうだな。」

スズメくんは空を見上げてそう言った。

「いつもごめんよ。」

と、ぼくが言うつと。

「お前じゃなくあの子のためさ。」

と、意気揚々に言った。

スズメくんもあの子のことが好きだ。

そして、たぶんぼくのこと好きだ。

こんな時でさえ、ぼくに気を使わせない言葉を言い放つなんて、ほんとにプレイボーイなヤツだ。

夜と共に雨がやって来た。

でも、今日はちょっと様子が違うみたいだ。

風も一緒になって来たのだ。

しかも、最大パワーと言わんばかりの勢いでやって来た。

「くそ！今日の雨はいつもとケタ違いだ！！」

ぼくを覆うように枝にしがみついているスズメくんが言った。

ぼくはスズメくんの危機を感じた。

「ダメだ、スズメくん。非難して！！」

「バカヤロー、こんな雨どうってことないさ！！」

スズメくんは必死に枝にしがみつき、離さなかった。

——朝が来て、雨と風がやんだ。
スズメくんも疲れて眠ってしまった。

——ここ数日、あの子の言葉は届いていない…。
スズメくんはあれからずっと眠ったままだった。

ぼくの心は苦しくなって涙が出てきた。

あの子の言葉が聞けないからじゃなく。

スズメくん、君の声が聞けないから——。

不幸は続けてやってくる。
ふと、病室に目をやると、あの子がいなくなっていた…。

ひとりぼっちに、なっていた…。

やっぱり葉っぱの運命なんてこんなもんだ。

誰の役にも立てず、誰にも知られず死んでいく…。

分かってたんだ、恋なんてしたって実らないことくらい。
でも、少しは葉っぱの運命が変えられた気がした。

少しだけね…。

「葉っぱさん。」

いきなり下から声が聞こえてきた。

ぼくはびっくりした。

あの子が、ぼくの真下にいる。

すると、あの子が口を開き淡々と話し始めた。

「葉っぱさん、あのね。」

わたし、今日で退院するの。

葉っぱさんのおかげだよ。

勇気いっぱいもらったんだから。

ありがとう…

バイバイ。」

さっきまでの考えが覆された。ぼくの運命は少しどころか、ものすごく変えられたんだ。

「スズメくん、やったよ！

ぼく、プロポーズされたんだ。

君のおかげだよ。

君にも教えるね。

愛の言葉

ありがとう…

バイバイ。」

その日、ぼくは冬の風に揺られて宙に舞った。

（後書き）

絵本制作に考えた話です。

感想やアドバイスをあれば是非書き込んで下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3205d/>

あの葉っぱがおちたら

2010年12月8日10時37分発行